アスリートの躍動を記録するスポーツ・グラフィックス

Extreme PRESS

［エクストリームプレス］by AJPS

Vol.11
2014 SPRING

「聖杯決戦！」

FREE
ご自由に
お持ちください

［サッカー特集］
2013 Jリーグヤマザキナビスコカップ
Final & Semi-Finals

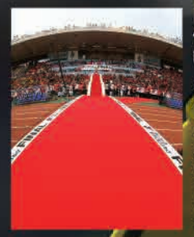
アスリートの躍動を記録するスポーツ・グラフィックス

Extreme PRESS

［エクストリームプレス］by AJPS

Vol.11
2014 SPRING

「日本スポーツプレス協会」
(Association Japonaise de la Presse Sportive)
1976年に発足。国内外の第一線で活躍するスポーツフォトグラファー、ジャーナリスト170名以上が所属。



[Cover Photo]
伊藤隆司（Jリーグフォト）-写真
Photo by Takashi Ito (J.LEAGUE PHOTOS)
あと数時間後に勝者が踏みしめる栄光の赤じゅうたんが、試合の行方を見守り続ける
2013.11.2 Jリーグヤマザキナビスコカップ決勝
浦和レッズ×柏レイソル 国立競技場
Canon EOS-1D X EF8-15mm F4L フィッシュアイ USM
1/1000 F4.0 ISO800 ホワイトバランス オート
サンディスク エクストリーム コンパクトフラッシュ カード 128GB

www.ajps.jp

Publishing ／ AJPS (Association Japonaise de la Presse Sportive)
Publisher ／ Akito Mizutani
Producer ／ Yoshiyuki Osumi
Planning Director ／ Rimako Takeuchi・Takahito Mizutani
Editor in Chief ／ Noriko Hayakusa
Editor ／ Masaomi Arakawa・Atsushi Nakayama・Hideyuki Imai
Tsutomu Takasu・Yoshiharu Hatanaka・Gen Matsueda
Design ／ Atelier[a:r] Rika Ito
Printing ／ Hankyu Co.,Ltd.

特別協力：公益社団法人 日本プロサッカーリーグ（Jリーグ）
http://www.j-league.or.jp

CONTENTS

「聖杯決戦！」

巻頭エッセイ Vol.11「変わらない存在」
飯塚健司-文 Text by Kenji Iizuka

Moments
築田 純-写真 Photo by Jun Tsukida
早草紀子-写真 Photo by Noriko Hayakusa
清水和良-写真 Photo by Kazuyoshi Shimizu
飯村健司（柏レイソル）-写真 Photo by Kenji Iimura (Kashiwa Reysol)
小城崇史-写真 Photo by Takafumi Kojo
原 壮史-写真 Photo by Masashi Hara
野本浩一郎-写真 Photo by Koichiro Nomoto
藤田真郷-写真 Photo by Masato Fujita
兼子愼一郎-写真 Photo by Shinichiro Kaneko

Close Up
2013 Jリーグヤマザキナビスコカップ ニューヒーロー賞
齋藤 学 Manabu Saito［J1リーグ 横浜F・マリノス］
「ヤマザキナビスコカップはチャンスをつかむ場所」
岩本勝暁-文 Text by Katsuaki Iwamoto
山田高央／今井恭司-写真 Photo by Takao Yamada／Kyoji Imai

Impression
「背景と被写体のバランスが揃う一瞬が勝負」
伊藤隆司（Jリーグフォト）-写真 Photo by Takashi Ito (J.LEAGUE PHOTOS)
木ノ原句望-文 Text by Kumi Kinohara

「変わらない存在」 飯塚健司

サッカーを観るのは、決してはじめてではなかった。むしろ、すでに多くの観戦経験があった。いつものスタジアムで、いつもと同じ感覚でキックオフを迎えた。しかし、多くの試合が忘却の彼方となってしまったのに、あの試合はいまも強く印象に残っている。

1992年9月5日——。当時は数少なかったサッカー専用スタジアムである大宮サッカー場で、Jリーグヤマザキナビスコカップ第1節の三菱浦和レッズ－ジェフユナテッド市原が行なわれた。翌年に開幕するJリーグに先駆けて開催された公式戦で、大勢の観衆が詰めかけていた。とはいえ、もともとサッカー熱が高い土地柄である。過度の期待はなく、やはりいつもと同じ感覚で訪れていた人が多かったように思う。

ところが、いざ試合がはじまると一気に引き込まれた。プロリーグ開幕を控える選手たちのプレーは迫力&スピードがあった。展開もまた、絵に描いたようだった。ジェフが先制し、レッズが追いつく。2度これを繰り返し、延長サドンデスに突入した。そして、延長前半の3分、ジェフに決勝点が生まれた。

大多数の観衆は、この結果に打ちひしがれた。しかし、一方でこれまでになかった感情が芽生えたのも事実だった。「なんだよ負けやがって。また応援するしかないだろ」という感情である。自分自身も大宮サッカー場で開催された同年のJリーグヤマザキナビスコカップをすべて観戦してしまった。そして、いつの間にか取材する立場になっていた。あの試合から、すでに20年以上が経過している——。

時代が変われば、多くのものが変化する。サッカー界にもさまざまな動きがあり、変化があった。しかし、Jリーグヤマザキナビスコカップはいまも変わらずに存在し、毎年新たな歴史を刻み続けている。

Moments

「聖杯決戦！」

築田 純-写真 Photo by Jun Tsukida
ひとつのボールをめぐり、ただひたすらゴールを目指す男たち。それを阻止せんと立ちはだかる男たち。サッカーは、まさに執念と執念がぶつかり合うスポーツだ。ボールにからみつく筋肉質な足と足、迫力ある魂の攻防を象徴的に捉えてみた。
2013.10.12 Jリーグヤマザキナビスコカップ 準決勝 横浜F・マリノス×柏レイソル ニッパツ三ツ沢球技場
Canon EOS-1D X EF200-400mm F4L IS USM エクステンダー1.4×(エクステンダー使用)
1/2000 F5.6 ISO400ホワイトバランス オート
サンディスク エクストリーム プロ コンパクトフラッシュ カード 64GB

早草紀子=写真　Photo by Noriko Hayakusa

1点勝負の展開に、ゴール前では熾烈な攻防戦が繰り広げられた。互いに一瞬の隙も許されない。途中から降り出した雨――仲間を鼓舞するイメージが沸く。ならば守備陣が見せる気迫の一瞬を捉えようと、幾度となくレンズを向け、常に彼らの表情を意識しながら狙い続けた末の一枚。

2013.11.2　Jリーグヤマザキナビスコカップ決勝
浦和レッズ×柏レイソル　国立競技場
Nikon D4 AF-S NIKKOR 400mm F2.8G ED VR +Ai AF-S
テレコンバーター TC-14E II 1/1600 F4.0 ISO2000
ホワイトバランス オート
サンディスク エクストリーム プロ コンパクトフラッシュ カード 128GB

清水和良=写真　Photo by Kazuyoshi Shimizu

4万6675人の観客で埋めつくされた国立競技場。柏が浦和の猛攻を防ぎ、カウンターからエース工藤が得点。14年ぶり2度目の優勝を飾った。
写真はレアンドロ・ドミンゲスと共に柏の攻撃のカギを握るジョルジ・ワグネルと浦和の平川忠亮の中盤での激しい空中戦。

2013. 11.2　Jリーグヤマザキナビスコカップ決勝
浦和レッズ×柏レイソル　国立競技場
Nikon D3s　AF-S NIKKOR 400mm F2.8G ED VR +Ai AF-S テレコンバーター TC-14E Ⅱ　1/1600　F4.0　ISO3200
ホワイトバランス オート
サンディスク エクストリーム プロ コンパクトフラッシュ カード 16GB

飯村健司（柏レイソル）=写真　Photo by Kenji Iimura (Kashiwa Reysol)

2013年元日の天皇杯決勝は累積警告で出場停止。優勝のピッチに立てなかった悔しさ、無念のケガで戦列を離れたチームメイトへの思い、サポーターへの感謝と様々な思いが詰まったゴール。エースの一撃がクラブに14年ぶり2度目のヤマザキナビスコカップと4つ目のタイトルをもたらした。

2013. 11.2　Jリーグヤマザキナビスコカップ決勝
浦和レッズ×柏レイソル　国立競技場
Nikon D4　AF-S NIKKOR 400mm F2.8G ED VR　1/1600 F2.8　ISO1600　ホワイトバランス　オート
サンディスク エクストリーム プロ コンパクトフラッシュ カード 16GB

小城崇史–写真　Photo by Takafumi Kojo

2007年のACLを最後に優勝から遠ざかっている浦和。それだけに、このクラブを愛するサポーターたちの思いは強い。タイトル奪取まであとひとつ。勝利を願う気持ちが大きなうねりとなって、スタンドを深紅の波で染めていく。

2013.11.2　Jリーグヤマザキナビスコカップ決勝
浦和レッズ×柏レイソル　国立競技場
Canon EOS-1D X　EF70-200mm F2.8L IS II USM　1/100
F5.6　ISO100　ホワイトバランス オート
サンディスク エクストリーム プロ コンパクトフラッシュ カード 32GB

原 壮史=写真　Photo by Masashi Hara

シャッターを切ってから30秒後まで、僕の中でのスコアは1-1だった。同点だと思われたゴールはオフサイドの判定。レンズを覗いていると、選手と同じ間違いをすることがある。興奮の気持ちは写真にハッキリ表れたが、数分後には0-1で試合が終了した。

2013.11.2 Jリーグヤマザキナビスコカップ決勝
浦和レッズ×柏レイソル　国立競技場
Nikon D3S AF-S NIKKOR 300mm F2.8G DII+ AI AF-S
テレコンバーター TC-20EIII　1/1250　F5.6　ISO5000
ホワイトバランス オート
サンディスク エクストリーム プロ コンパクトフラッシュ カード 16GB

野本浩一郎=写真　Photo by Koichiro Nomoto

サッカーは危険なコンタクトが反則なスポーツであるが、激しいプレーが箇所にある。一発勝負ではお互いが負けられない戦いになり、時間が経つに従い激しいプレーが繰り広げられる。それでも負けられない選手は精一杯のプレーでチームのために体を張る。

2013.10.12 Jリーグヤマザキナビスコカップ 準決勝
浦和レッズ×川崎フロンターレ　埼玉スタジアム 2002
Canon EOS-1D X　EF400 F2.8L IS USM+エクステンダー
EF1.4×1/1000　F4.0　ISO3200　ホワイトバランス オート
サンディスク エクストリーム プロ コンパクトフラッシュ カード 128GB

原 壮史=写真　Photo by Masashi Hara

試合終了のホイッスルが鳴る時に誰を見ているか、いつも迷う。ただ、この試合は早々に心は決まっていた。「初の9番を引き継いだ男」から「初の9番といえば工藤」へ。彼もまた、みんなに愛される選手であり続けるだろう。

2013.11.2 Jリーグヤマザキナビスコカップ決勝
浦和レッズ×柏レイソル　国立競技場
Nikon D3S AF-S NIKKOR 300mm F2.8G DII+テレコンバーター
TC-20EIII　1/1600　F5.6　ISO5000　ホワイトバランス オート
サンディスク エクストリーム プロ コンパクトフラッシュ カード 16GB

藤田真郷=写真　Photo by Masato Fujita

試合中に降り続けた雨は止んだ。しかし、国立競技場に響く歓喜の声が止むことはなかった。サポーターはお互いの手を力強く握り合い、そして拳を空へと突き上げた。競技場へ通い、応援し続けた努力と時間が報われた瞬間だ。

2013.11.2　Jリーグヤマザキナビスコカップ決勝
浦和レッズ×柏レイソル　国立競技場
Canon EOS-1D X　EF70-200mm F2.8L IS Ⅱ USM　1/1000
F4.0　ISO4000　ホワイトバランス 4800K
サンディスク エクストリーム プロ コンパクトフラッシュ カード 32GB

兼子慎一郎=写真　Photo by Shinichiro Kaneko

その視線の先に何を見据えているのか？ この一戦に懸けた彼の想い、背負っているものの大きさを感じた。美しい敗者なんて言葉は失礼に思えてくる。願わくば、次は笑顔が撮れることを。

2013.11.2　Jリーグヤマザキナビスコカップ決勝
浦和レッズ×柏レイソル　国立競技場
Canon　EOS-1D Mark Ⅳ　EF 400mm F2.8 L Ⅱ USM　1/1600
F3.2　ISO1600　ホワイトバランス　オート
サンディスク エクストリーム プロ コンパクトフラッシュ カード 32GB

Close Up

「ヤマザキナビスコカップはチャンスをつかむ場所」

2013Jリーグヤマザキナビスコカップ
ニューヒーロー賞

岩本勝暁=文／山田高央=インタビュー写真
Text by Katsuaki Iwamoto ／ Photo by Takao Yamada (Interview)

齋藤　学

［J1リーグ　横浜F・マリノス］

**左サイドでボールを持つと、
DFを1人かわして豪快なミドルシュートをたたき込んだ。
2013年のニューヒーロー賞に選ばれた齋藤学。
ヤマザキナビスコカップでの活躍をきっかけに、
日本代表まで登り詰めた。
酸いも甘いも経験したからこそ、伝えるべきことがある――。**

――ニューヒーロー賞の受賞、おめでとうございます。

齋藤　ありがとうございます。選んでいただいて、たいへん光栄です。ただ、チーム（横浜F・マリノス）が決勝に行けなかったので、正直なところ、2013年のヤマザキナビスコカップは悔しい気持ちが残っています。選出されて驚きましたが、自分の役割をまっとうしようと考えながらプレーしていた結果だと思います。

――齋藤選手にとって、ヤマザキナビスコカップはどういう位置づけの大会ですか？

齋藤　もちろんタイトルの1つですから、決勝に出場したいという思いが強いです。決勝はいつもテレビで見ているだけですが、両チームのファン、サポーターで一杯に埋まった国立競技場のあの雰囲気の中で試合をしたいという思いは昔からありました。

――過去のヤマザキナビスコカップで、思い出に残る試合はありますか？

齋藤　2010年の神戸戦は、プロになって初めてゴールを決めた試合でした。1ー1の同点に追いついたゴールだったので、とても印象に残っています。ちょうど2010年南アフリカW杯と重なっていて、ヤマザキナビスコカップが4試合くらい続いていました。2試合ほどスタメンで出場させてもらって、すごく楽しかったですね。

――当時はどんな思いでピッチに立っていたのですか？

齋藤　プロに入って1、2年目の頃は、アピールすることを常に考えていました。やはりポジションは自分の力で奪うものです。横浜F・マリノスを見ていただければわかると思いますが、ベテランでもあれだけ動ける選手がいる。若手だからといって、簡単には試合に出られません。そのあとのJ1リーグ戦にどれだけ自分が出場できるか、どれだけチャンスに絡めるかということを常に考えてやっていました。

――過去のニューヒーロー賞を見ても、長谷部誠選手などそうそうたる選手が名を連ねています。

齋藤　FC東京が優勝した2009年に、米本拓司選手がニューヒーロー賞とMVPをダブルで受賞していますよね。彼は同い年でとても仲がいいんですけど、受賞を聞いたときはすごく悔しかった。当時の僕は、ひざの手術をして入院中でしたから。だから、うれしい反面…。いや、9割くらい悔しかったかな（笑）。でも、同じ1年目であれだけの活躍ですからね。表彰式の様子をテレビで見て、すごいなあって感じたのを覚えています。

――あのときは決勝のゴールが、W受賞につながりましたね。一方、齋藤選手も2013年のヤマザキナビスコカップでは2ゴールを決めています。印象に残っているのは？

齋藤　準々決勝の鹿島戦で決めたゴールですね。それまではケガもあって、J1リーグ戦ではなかなか点が取れていませんでした。試合があったのはコンフェデレーションズカップによる中断期間が明けた後でしたが、その前のキャンプで何度もあの角度からのシュートを練習していたんです。すごくきれいに決まって、うれしかったですね。

――左サイドからドリブルで中に切れ込み、相手を1人かわして右足でミドルシュートを打ちました。

齋藤　はい。最近の試合では、ドリブルで1人を抜いても、必ず2人目がカバーに入っているんです。だから、なかなかシュートまで持っていくのは難しい。鹿島もいつもならボランチがいるはずなのに、あの場面に限っては、そこだけスペースが空いていた。だからシュートが打てたんですけど、イメージ通りの形でした。あの試合をきっかけに、J1リーグ戦の後半戦、あるいは日本代表まで勢いをつなぐことができたと思います。

――東アジアカップのオーストラリア戦でも、ドリブルから見事なゴールを決めました。齋藤選手といえばドリブルからのシュートというイメージが定着しましたが、ドリブルに対するこだわりはありますか？

齋藤　ドリブルだけの選手にはなりたくないんです。よく、FCバルセロナのメッシに例えていただくのですが、言ってみれば僕にとってドリブルは選択肢の1つにしかすぎません。パスやシュートがあるからドリブルが生きる。でも、周りからそう見られているところがあるので、自分としてはもっといろいろなプレーができるようになりたいと思っています。もちろん、ドリブルは大きな武器です。ドリブルで仕掛ける回数も増えているし、チームにとっては僕のところで攻撃のスイッチが入る。攻撃のスピードを上げるとき、あるいはゴールに向かうときに、ドリブルは大事だと思います。

――独特の間合いを持っていますね。仕掛けるタイミングもあるのですか？

齋藤　特に決まりごとはありません。ただ、人に向かってドリブルするときは、対峙する相手のもう1つ後ろ、カバーに来ている選手や味方の位置、スペースを見るようにしています。逆に見すぎるとどっちに行くか迷うので、そこは一瞬の判断ですよね。行けるときは思い切って行くようにしています。

――齋藤選手は小学生のころから横浜F・マリノスの育成組織でプレーしてきた、いわゆる生え抜きです。ヤマザキナビスコカップを戦ううえで、後輩にアドバイスがあれば教えてください。

齋藤　ヤマザキナビスコカップはチャンスをつかむ場所だと思っています。特に予選リーグはスケジュールが厳しいので、どこのチームもある程度はメンバーを変えてくる。そこで与えられたチャンスをどう生かすか。あとは自分次第です。僕の例で言うと、2年目は5試合に出場して1点を取りましたが、チームは予選リーグで敗退しました。そのあとのJ1リーグ戦は別の若手が台頭してきたこともあって、ベンチにも入れなくなった。でも、あのときの悔しさは今でも忘れないし、苦しかった時期があるから今の自分がある。そういう意味でも、ヤマザキナビスコカップは若手にとってすごく貴重な大会だと思います。

齋藤 学●さいとう まなぶ

神奈川県出身。小学生時代から横浜F・マリノスの育成組織でプレーし、2006年にはAFC U-17選手権に出場。2008年には2種登録ながらJ1リーグ戦で7試合に出場し、翌年にトップチーム昇格を果たした。2011年は愛媛FCへ期限付き移籍。開幕から活躍し36試合に出場、14得点を挙げた。2012年に横浜F・マリノスに復帰し、その年のロンドン五輪に出場。2013年の東アジアカップでA代表デビューを果たし、オーストラリア戦では初ゴールを記録した。ドリブルの技術に長けており、「和製メッシ」と称されている。

《ニューヒーロー賞》歴代受賞者

（ ）内は当時所属チーム

今井恭司=写真
Photo by Kyoji Imai

前半終了間際、柏の工藤壮人が頭で合わせたゴールを守りきった柏が、1999年以来14年ぶり２回目の大会制覇。試合終了のホイッスルの音が国立競技場に響き渡ると、普段は感情をあまり見せないネルシーニョ監督がベンチ前で喜びを爆発させた。

2013.11.2 Jリーグヤマザキナビスコカップ 決勝 浦和レッズ×柏レイソル 国立競技場
Canon EOS-1D X EF16-35mm F/2.8L II USM 1/1000 F4.0 ISO1600
ホワイトバランス オート
サンディスク エクストリーム プロ コンパクトフラッシュ 128GB

サンディスク
エクストリーム プロ コンパクトフラッシュ カード 128GB

Impression

プロカメラマンが選ぶ
〈サンディスク エクストリーム プロ コンパクトフラッシュ カード〉×〈Canon EOS-1D X〉

「背景と被写体のバランスが揃う一瞬が勝負」

伊藤隆司（Jリーグフォト）＝写真／木ノ原句望＝文　Photo by Takashi Ito（J.LEAGUE PHOTOS）／ Text by Kumi Kinohara

「罠を仕掛けて待つ」こだわり

勝利を決めて笑顔を見せる監督の周りで、狂喜乱舞する選手やスタッフ。ピッチを見つめるJリーグチェアマンの横顔の向こうに、ぼんやり浮かぶ競技場の電光掲示板。伊藤隆司が撮るスポーツ写真には背景を意識したものが多い。そこには、「背景を含めてが写真。ピントが合っているところよりも、合っていない、ボケているところに意味がある」という、彼のこだわりがある。

伊藤が背景を意識した構図づくりをするようになったのは、スポーツ雑誌社のカメラマンとして駆け出しだった頃、海外の取材で出会ったイギリス人カメラマンの一言がきっかけだった。「背景を決めろ」。ピントが合っているのはメインの被写体だが、その周りに何が写っているか。何を写すか。そこまで考えて構図を決める。そして、そこにメインの被写体が入って来るのを待ち、主役が登場してきたところでシャッターを切る。ちょうど獲物を狙うハンターのように「罠を仕掛けてじっと待つ」のだという。

背景を求めて

フィルム撮影の時代ならではの「待ち」の姿勢ではあるが、背景を意識することが伊藤のベースになった。そして、それが高じて、初のオリンピック取材だった1984年ロサンゼルス大会では、思い切った行動に出ている。陸上100メートル走決勝で走るカール・ルイスを最高の位置で撮るために、夕刻開始の試合を前に、早朝5時にスタジアム入りしてゴール脇の場所を確保した。だが、ふと、競技場の上階からスタンドを含めた"絵"を思いついた伊藤は、会場の担当者に粘り強く掛け合って上階スタンドでの撮影許可を取り付け、100メートルレーンを眼下にその時を待った。その４年後のソウル大会では、マラソンの瀬古利彦選手のゴールを撮るために、競技場に前夜から密かに泊まり込んで位置を決めた。そんなこだわりの姿勢は、デジタル全盛となった今日でも変わらない。

サッカーの試合では、どちらが勝つか、誰が得点するか、得点後に選手はどこに動くかを、傾向分析と経験による読みを駆使して割り出し、カメラを構える。そして、報道としての決定的瞬間を意識しながら自分ならではの"絵"を狙う。一目瞭然の直接的な写真よりも、「見る人が少し考えて何かを感じてもらえたら」と言う。文章なら、行間を読ませる。そんな一枚か。もちろん、撮ったものに対してのこだわりも強い。特に独立してからは、記録資料として残すことに腐心している。

イングランドサッカー協会など海外の競技団体や競技場には、昔の選手の貴重な写真が多くある。だが日本では、新聞社などでも写真が資料として保存されていることは、以前はほとんど稀だった。そこで、スポーツ写真を記録として残す重要性を感じた伊藤は、93年からJリーグオフィシャルとしての仕事を通じて、写真の保存にも取り組むようになった。「百年後にも記録としてきちんと写真を残したい。それは日本サッカーの財産にもなると思う」と話す。

高速書き込みでノンストレス

記録保存を念頭に、こだわりの瞬間を撮り続ける。そんな伊藤の仕事場に、書き込みの速さと容量たっぷりの記憶メディアである、サンディスク エクストリーム プロ CFカード128Gの存在は欠かせない。

サッカーでは、シュートの瞬間からゴール後に駆け寄ってくる同僚に手荒い祝福を受ける場面まで、連写で撮る。だが、書き込み処理能力が不十分な場合、選手の動きを睨みつつ、カメラが処理作業で躓くのを避けるために、撮り手が一瞬待たなくてはならなかった。連写中に、である。「その間わずか数秒でもイライラ、ヒヤヒヤだった。でもこのCF（コンパクトフラッシュ）カードの速さなら、そんなストレスもない」と伊藤は信頼を寄せる。

それに、かつてはサッカーのワールドカップやオリンピックなど長期の国際大会には、大量のフィルムを２つのスーツケースに詰め込んで出かけたが、「今ではCFカード一枚で済む。かなり移動が楽になった」と笑う。以前なら、空港では荷物の重量やX線チェックを心配し、現地でも撮った写真を日本へ送るべく、大会中でも空港に何度となく駆け込んだ。そんな煩わしさとはもう無縁だ。もちろん、2014年のサッカーワールドカップ・ブラジル大会も「このカードがあれば心強い」と話す。

新たなツールを手に、伊藤のこだわりの作業はこれからも続く。

伊藤隆司 ●いとう たかし

1958年島根県出雲市生まれ。東京写真専門学校（現・東京ビジュアルアーツ）商業科卒業。'79年（株）ベースボールマガジン社入社、『陸上競技マガジン』編集者兼カメラマンを経て'85年独立。'93年（有）SHOT設立。陸上、サッカーを中心に活動し'84年から夏季オリンピック８大会連続、'90年からサッカーワールドカップ６大会連続取材。'93年からJリーグオフィシャル、'98年から日本陸上競技連盟公認カメラマンに。

SanDisk®

最大160MB/秒※1の世界最速※2
256GB大容量コンパクトフラッシュ、新登場

VPG65に対応し、シネマ品質の4K動画撮影に最適な
サンディスク最高峰のコンパクトフラッシュ、エクストリーム プロ シリーズ。

最大160MB/秒の読取り速度
サンディスク エクストリーム プロ
コンパクトフラッシュ® カード
256GB UDMA7対応

UDMA7
UDMA7対応カメラとの組み合わせで、
高精細映像の録画や連続撮影をより快適に。

［大容量］
256GBの大容量で、高速連写による
膨大なRAW+JPG画像も、
4K動画・フルHD動画も保存。

［耐久性］
衝撃、振動、気温、湿度など過酷なテストをクリアし、
極限の状況下でも正確に動作するよう設計。

［VPG65］
65MB/秒の最低転送速度を保証する
ビデオパフォーマンスギャランティーVPG65に対応。
シネマ品質の4K動画の撮影や録画に最適。

［信頼性］
厳しいストレステストをクリアした無期限保証*3付き。

超高速性能・大容量
Extreme Series
エクストリーム シリーズ

サンディスクはプロカメラマンの85.5%*から『安心のブランド』と評価されました。*2012年8月当社調べ（複数回答あり）。詳細は当社Webにてご確認いただけます。http://www.sandisk.co.jp/leader2012/

サンディスクはフラッシュメモリーカード世界*・国内**シェアNo.1ブランドです。 サンディスク 検索

* 2012年Gartner調べ（Gartner Dataquest ID No G00252212. 05/15/13）**2012年GfK Japan調べ（家電量販店販売実績集計 メモリーカード・数量シェア）※SanDisk、SanDiskロゴ、Compact Flash、コンパクトフラッシュ、及びSanDisk Extreme Proは、米国及びその他の国におけるSanDisk Corporationの商標または登録商標です。その他の商標も特定の目的のためのみに使用されるものであり、各権利者によって商標登録されている可能性があります。 ＊1 最大書込み速度の数字はサンディスク社内テストの結果に基づきます。読取り速度はこれより遅くなります。ホスト機器によって読取り/書込みの速度は異なる場合があります。1.1メガバイト(MB)＝100万バイト、1ギガバイト(GB)＝10億バイト、1倍速＝150KB/秒。記載された容量の一部はフォーマット及びその他の機能に使用されるため、すべての容量をデータ保存のために使用することはできません。＊2 256GBの商品に限ります。 ＊3 保証内容に基づきます。

Extreme PRESS by AJPS
アスリートの躍動を記録するスポーツ・グラフィックス［エクストリーム プレス］
Vol.11 2014 SPRING
発行所・一般社団法人日本スポーツプレス協会 〒112-0013 東京都文京区音羽1-21-10-603 TEL03-3946-9033 http://www.ajps.jp
発行人・水谷章人 編集・エクストリームプレス編集委員会
【無料】